自由連合

Libera Federacio

N-ro 40

1972年 8月10日

姫路市亀山354

自由連合社

振替 大阪1264

ドキュメント

隠された情況の発火点

5・28～7・8 釜ヶ崎

《5月28日》 朝6時20分頃鈴木組組員達は、あいりん総合センター寄り場において鈴木正九郎会長御大自らの指揮で労働者に襲いかかった。それは労働者に対する暴力支配がゆるぎだしたことへの逆証明であり、思あがきにさも似ていた。

26日に契約違反等業務上のルーズさを労働者に追及された鈴木正九郎は、鈴木建設興業社長ではなく暴力団淡能組系天梅会鈴木組々長に変貌していた。鈴木建設興業は鈴木組の単なる資金源にすぎず博徒が労働者の設定した労働争議という土俵で闘えるはずがない。

の、彼らは威信回復のため、夕方わざわざ釜ヶ崎に出向き、イチャモンをつけた労働者の一人を事務所にラチした。三時間にわたる不法監禁、木刀などによるリンチの上、鈴木正九郎はその労働者を次のようにたしなめ帰した。「明日全員頭を下げてあやまりに来い、そうすれば許してやる」と。の

翌27日朝、センターにおいて又もや一人の労働者が連れさられようとした。が、幸い仲間の発見により未遂に終った。

この二つの事件は労働者の結束をいやがおうにも強めたのだった。参集した労働者30余名が、同日鈴木組に抗議するビラをまいたのである。しかしビラまきを終え、鈴木組の求人用バスの前で集会を始めたもののアジテーションは30秒と続かなかった。マイクを中心に集る労働者に、まず鈴木正九郎の木刀が舞った。身を延して防衛する労働者は鈴木正九郎をとりおさえた。しかし他の組員達もそれぞれ木刀、パイプを手に襲いかかる。圧倒的な数の労働者に囲まれた正九郎は土下座してあやまり難をのがれた。ヤクザの報分としてはあまりにもミジメな幕切であった。やっと到着した警官に保護されたのだ。配下の組員達ではなしに。

正九郎が消えた後も組員達の木刀乱舞はしばらく続いた。しかし組員一名が逮捕連行された時センターは一時の安寧を取戻した。そしてビラをまいた部分は結着がついたものとして簡単な総括集会の後、センターから引き上げた。

しかし残った労働者の怒りはまだ静っていなかった。組員達が襲撃用に乗り込んできたトヨタカローラはひっくり返され、焼かれたのだった。

逮捕者　労働者2名（起訴2名）
鈴木組1名（韓誠）

× × ×

朝鈴木組が引き起した問題を労働者はそのまま見過しはしなかった。釜ヶ崎における暴力支配の総元締めである西成署に対して、自然発生的に抗議行動が起った。二千名の労働者の反乱は釜ヶ崎中でくりひろげられた。

逮捕者　6名（起訴2名）
泥酔保護29名

《5月29日》 反乱が2日目に入ると、定石通り警察権力はマスコミ総動員で煽動者説を打ち出してきた。なんと4・50人の新左翼系活動家がゲリラを指揮したへ（読売）というのである。ゲリラは釜ヶ崎つてない阿部野へ天王寺駅前）まで出撃した。

逮捕者　10名
泥酔保護22名

《5月30日》 「赤旗」と並び真実の報道で知られる読売新聞はこの日の反乱を煽動したに新左翼系活動家は90人であるという。そして釜ヶ崎にいる活動家は諸氷合わせて百十数人もいるという話だ。

新聞記者はにし算もわからぬアホウばかりか、それとも警察は煽動者の一人もようパクラヌ腰ヌケ、能ナシばかりか。90人の煽動家がいた割には精彩を欠いた反乱であった。

逮捕者　5名
泥酔保護15名

釜ヶ崎の犬ニ達

反乱は三日で終った。そして31日以後各新聞はきまり文句で釜ヶ崎を論評しだした。

「アイリン地区はヒドイ所です。暴力手配師は野放しだし、転安は有名無実。十年一昔の状態で労務者が怒るのはアタリマエです。そこにつけ込み騒ぎを煽動したのが赤軍をはじめとする過激派でした。これではいつまでたってもアイリン地区は過激派に利用されるだけで良くなりません。善良な労務者が迷惑します。過激派を取り締りなさい」

手配師問題は釜ヶ崎のヒドさを説明する形容詞以外の何物であるのだろうか。そして過激派キャンペーンは釜ヶ崎の抱えた問題の本質をごまかす最も好都合な手段であった。30日、大阪府警刑事・警備部は西成署と過激派取り締りのため合同デスクを設置した。

「悪質手配師への早急な対策をとるか、新左翼系活動家と労働者を切り離さないかぎり騒ぎは長期化し"力"で押えても再発するという局部の判断から"合同デスク"の設置となった」（毎日）

府警の言う悪質手配師への早急な対策というものがあり得るだろうか。手配師問題は捜査四課が担当すれば事足れりといった質の問題ではないのであり、建築産業の構造そのものまでに言及されねばならない性質のものである。「建築産業は他の産業よりも七〇年遅れている」とよく言われるが、その遅れている七〇年の位相の中にいきづいているのが手配師たちなのだ。

《6月9日》 5月26日に鈴木組の机垂町事務所に連行され、三時間にわたる木刀等によるリンチを受けたHさんは鈴木正九郎はじめ組員三名に対する告訴状を大阪地検に提出した。地検の係員の話では「一応受理しておきますが、現在組員の韓が逮捕取り調べを受けているので併れて調査するようになると思います」ということであった。罪名は不法監禁、暴行致傷。

《6月15日》 5月23日の手配師広田和夫によるFさん暴力事件へFさんは助骨骨折で四週間入院）、吉

許したけさんの鈴木組事件、そして又ぬきさしならぬ事件が起った。

(1)三角公園で競輪のノミ屋の手伝いをしていたKさんは反撃に当り仕業をヤミで流していたことが発覚、元締めのヤクザ数人に目隠しのうえどこかの事務所に連れ込まれた。木刀で殴られることはもとより、両手上腕部をライターで焼かれるという壮絶なリンチを受けた。無我夢中で逃げたKさんは三角公園で警官に保護され、D病院に入院した。

(2)16日、暴力手配師福西はセンターにおいて引越しの手伝いということで労働者5名に声をかけ、奈良競輪のノミヤのサクラをさせようとした。しかし労働者はそのような就労を拒否し、一日分の日当を要求した。当然その返礼は暴力であった。そして翌23日同じように求人に来ていた福西はその労働者達に発見され、追求をうけた。多くの労働者に取り囲まれた福西はじどりくじどりした。自己批判書を書き、慰謝料を払うことを約束したものの福西は自らすすんで西成警察に保護されていった。

× × ×

この二つの事件は釜ヶ崎における暴力団と労働者との関係性を如実にさし示しているだろう。ノミ屋であろうと手配師であろうと労働者を対象とした暴力団の収入源になっている。重要なのはその事実とともに、暴力団の存在は釜ヶ崎という社会構造の中で重要な機能を果していることであろう。いってしまえば、彼らを抜きにして釜ヶ崎労働者の搾取を語れないのであり、暴力団の不去性と釜ヶ崎労働者の自由性はなんらか矛盾することなく釜ヶ崎の秩序を形成しているのである。

釜ヶ崎労働者の、労働者としての自立の萌芽は、暴力団との対峙なしにはありえない。既製秩序からの脱却は、その秩序の他の構成員への決意を要求する。

リンチを受けたKさんは、活動家の入院見舞で情報がもれることを怖れたのだろうか、二日後には病院を逃げ出した。ノミヤのサクラを強要されに労働者は不払い賃金を搾取させるため、手配師をきちかまえた。暴力団との対峙を回避するか、あるいは受けてたつかという選択は労働者個々の"生き様"を決定するのである。

釜共斗への弾圧

《6月26日》　鈴木組一斉手入れ。各紙面はこのことを「愛隣騒動の火元手入れ」「暴力手配師を摘発」と書きたて11年ぶりの府警の勇断をほめたたえた。そして新聞の報道により新な事実――5月27日午前六時頃及び三時頃の二度にわたって鈴木正九郎らは木刀等を用意し乗用車で野員の会へ押しかけた――が判明。いよいよ5月28日のセンター殴り込み事件の計画性、当然性がはっきりしたといえる。

鈴木組々員三名逮捕。正九郎他二名手配

《6月28日》　当然予測できた事だった。一昨日のズル新の報道は釜共斗へ暴力手配師直放釜ヶ崎共闘会議し内部にも警察権力への一片の幻想を抱かせたのではないか。「鈴木組ザマアミロ」と思っていた矢先、寝込みを襲われたような野鳥の会の手入れであった。サンケイは言う「7月はじめに大規模なデモを実施、再び騒動を計画しているという情報もあるため、先制攻撃の意味も含めてこの日の手入れ」と。

この日を境にズル新の書き方は一変した。いつのまにか釜共斗が何もしない鈴木組を襲い、ケガをさせ、労働者を煽動したことになり、挙句の果てには焼かれた鈴木正九郎の重の消火作業を妨害したことになっている。

敵対は動きはじめた。最初は二名だけだと思っていた逮捕者も一名、また一名とふえ六名になった。ある者は野鳥の会事務所の家宅捜査の立会におもむき逮捕され、ある者は西宮市内のはんぱで逮捕された。その六名は十三橋警察から堺北警察という非常に広範囲に点々と分散留置された。それは実質明らかな敵対、弁護活動の妨害を意味していた。

弁護士接見は15分以上は許されなかった。そして差入れに関しては事毎に尽くしがたいものがあった。捜査本部からの指令で、直接の受付は一切拒否、ということになっていた。歯ブラシ、チリ紙といった差入れ五点セットと肌着だけなのにまず西成署へ持って行かねばならない、話はそれからだというのである。三箇所の警察でけんもほろろに追い返されたのである。

関西救援センターと連絡のうえ、西成署へ抗議、こちらの要求を受け入れさせ差入れを終了したのは夜の八時を過ぎていた。

令状逮捕者　六名
家宅捜査　十一ヶ所

× × ×

夜、西成署前抗議集会、自然発生的抗議デモ――

抗議集会の折、釜共斗の代表5名が署長に面会を求めて西成署に入った。ところが、そのうち一名には令状がでておりすぐ執行された。彼に令状がでていることは予想すら不可能であった。何故なら5月23日から未日まで彼は東京に行っていた。つまり、5月28日の事件当時大阪には居なかったのである。そして弁護士接見の結果、朝逮捕された労働者の内一人は事件発生時刻にはまだドヤで寝ていてセンターに出ていないことも判明した。

令状逮捕　二名
現行犯（公妨）　一名

× × ×

今回の逮捕は確証を得られぬまま行われたものでしかない。「あいつならやったにちがいない」「あいつなら何か知っているだろう」という見込逮捕の限度をも通り越した、捜査のための逮捕と言える。

《6月29日》　夕方になると野鳥の会の事務所に通じる辻という辻は私服で固められた。私服の目を逃れて事務所に到達するのは絶対不可能なのだ。そして目をつけられている活動家はそれぞれ四五名のガードマン付きで歩かされるハメになった。尾行どころの話ではない同行である。"煽動家"は徹底的にマークされたが、労働者は抗議行動をやめはしなかった。

《6月30日》　センターにて早朝抗議集会。私服いと多し。

《7月1日》　6月26日に逮捕されたはずの鈴木組員はもう出てきていた。何と微罪扱い、二泊三日なのである。その馬鹿奴はしょうこりもせず一人の労働者をラチしようとしたのだ。ひたいの大きなキズは、鈴木組々員藤本強(30)の何よりの証拠であり、乗ってきた車は5月28日朝焼かれた正九郎のカローラと同じ色ナンバーであった。

最早明々白々である。鈴木組の手入れは世論操作のための大義名分つくりのためであった。そして鈴木組の自作による釜共斗攻撃への布石以外の何ものでもない。この日鈴木正

九郎は弁護士に付添われて、阪府警本部に出頭、自手した。釜ヶ崎のメンバーが逮捕されたのを知って安心したのだろうか、警察との商取引のにおいがする。

夜、西成署前にて抗議集会。

令状逮捕 一名

自立する労働者

〈7月8日〉 野宮の会二次手入れ。再び四名の労働者が逮捕、二名が手配された。驚かざるを得なかったのは、逮捕された者の中に鈴木組を告訴したHさんがいることだった。さらに兇器準備集合容疑までデッチ上げられていることに全くては言う言葉もなかった。裏付証拠と称し仕事道具のシノ等を手当り次第持ち去っていった。Hさんは前日、告訴の件で山下検事から呼び出しが来て告発人のY、代理人の弁護士二名と共に検察庁へおもむいたところであった。山下検事の対応は全く無礼なもので、さんざん待たせたあげくに「また後日」ということであったもののHさんの逮捕など誰が想像しただろう。

家宅捜査 五ヶ所

× × ×

この四名の逮捕で、赤軍に象徴される過激氷炭動キャンペーンは完成された。捜査本部の発表はテルアビブ空港乱射事件に上乗せされた形で市民社会に吸収されていっただろう。そこには釜ヶ崎における手配師問題等が入いり込む余地は結果として全く与えられなかった。こもあろう、警察側の狙いはあくまで活動家と一般労働者との分断、遊離なのである。皮肉な言い方をすれば活動家が釜ヶ崎において地盤を固めつつあることへの逆証を警察自ら暴露した、といえる。事実釜ヶ崎は変ったのだ。

5月28日の夜の反乱で逮捕、起訴されたSさんは、オー阪公判冒頭陳述で次のように言った。

「私は十八の時から土方をしている。私は訴えに西成署に何度も足を運んだことがある。しかし一度でもまともに話を聞いてくれたことはない。馬鹿にしたような差別したような……。私はそういう西成署のやり方に対して抗議としてやった……と。それはメーデーで逮捕され、起訴されたIさんも同じである。

そしてどんな集会でも「オレにもシャベらせろ」とマイクを取りにくる労働者がでる。こんなことが二年前の釜ヶ崎であり得ただろうか。労働者が不満を、意訴実体を表現し得るだけの情況が現在の釜ヶ崎には存在しているのである。

その情況の基盤となり得ているのが、越冬対策へ本格的参照し等現実の問題を通じて続けてきた我々の日常活動であるだろうし、我々を釜ヶ崎からタタキ出さないかぎり、釜ヶ崎労働者としての自立を阻止し得ないだろう。その意味で、我々のことを煽動者と呼ぶのなら喜んで呼ばれよう。もし違う意味で呼ぶものがいるならば、それ達は釜ヶ崎が奴隷の街であることを喜ぶ看達である。バカヤローどもが?

今回の鈴木組事件は、それ以前に纒れれてきた数々の現場闘争の延長線上にあった。現場斗争は釜ヶ崎労働者の間に拡がりをみせ鈴木組をはじめとするケタオチ業者にとっては看過できない問題となったのである。

釜ヶ崎の情況を、産業構造を通して説明してみたところで何か解決できるはずがない。現実の労働現場で弁当のオカズの悪さなどささいなことを一つ一つ主張していくことの中からしか釜ヶ崎は変わりはしない。

釜ヶ崎における運動は、労働者の現実の利益をたれ、理念としての運動が先行するとき堕落する。そして釜ヶ崎を日本全体の社会状況とただ理念的に照し合わせ、革命のバネ的存在としてのみ評価するとき、利用主義におちいるのである

〈未完〉

福田建夫

資料(1)

事実は次の通りである

私は鈴木組を告訴した

市内は市内

5月26日朝6時頃私はあいりん総合センターに向いました。そして友人達と仕事を探しましたが、いいのがないので鈴木組のマイクロバスに乗り込みました。仕事は町屋土工とセンターのカードには書いてありました。その他の条件は日当二四〇〇円、食事付、日雇失業・健康保険有帰りは送り無し、現場は市内でした。

マイクロバスが扇全町の事務所に着くと全員車から降ろされ、それぞれ現場を割り当てられました。私は社長の鈴木正九郎に東大阪市の現場に行ってくれと言われたのですが、「仲間で来ているので、皆が一つの現場で働けないか」と聞きました。すると社長は「二人ずつバラバラだ」「今朝よその組と何かモメてからうちの車に乗ったのか、ガタガタしに来たのか」と言うのです。一人が「今日の手配はヤミ求人やろ」と言うと社長は怒り出し、言葉荒々しく「うちとこはセンターに登録済みだ、毎日いちいちビラを代えなくていいんやし」と言うのです。又、「お前らの俺の所に何しに来たんか、仕事やる気があるのか」とも言いました。

社員の一人が又現場の割り振りを始めると、社長は大声で「奈良の西大寺に二人行ってくれ」と言い出したので、私は皆といっしょに「奈良とか東大阪は大阪府内ではない、契約違反だ。そんな遠い所へは行けない」と抗議しました。すると社長は「奈良市内も大阪市内も市内にかわりはないじゃないか」「ガタガタ言うな。お前ら現場でモメ事起こすとしょうちせんぞ、早よ仕事へ行け」と非常にきつい調子で言うのです。

誰かが「しょうちせんぞとはどういう事ですか」と聞くと、社長は「こいつらを一人も帰しちゃいかん。見張りをつけとけ」とそばにいた社員六人程に命令しました。腕を掴まれたりしている人もいるので、私はなにもせず、皆と一緒に数川組の駐車場へ行かざるを得ませんでした。

駐車場では社員達に「お前ら社長に何って何という口のきき方か」「お前らいてまうぞ」などとおどされました。それに事務所へ入る辻を四人の社員が固め、私達には二人の監視がついていたので逃げることは不可能でした。しばらくして社長が来て代表を出せというので、相談のうえHさんを代表にたてました。Hさんは社長、社員二人と事務所に入り数分後出てきました。

社長は「仕事をしてくれ」と言い仕事の割り振りをしだしました。私はMさんと一緒に又東大阪市の現場を割り当てられました。二人は一応仕事に行くことに同意し、直行の人と三人でバス停に向いました。

バス停の所まで行ったのですが、条件の違い、社長、社員の態度などに非常に腹がたち、何かねばならな

い義務もないので二人で相談して直行の人に「帰ります」と告げ、追いかけられると困るので、バス停から電車の駅まで走りました。そして電車で釜ヶ崎に戻ったのです。

西成署の者だ…

私は映画を見たり、三角公園で時間をつぶしたりしてから、夜勤仕事を探しに四時頃センターに出ました。五時半頃港湾作業のバスが来たのですが、私は乗り切れず仕事にアブレてしまいました。ブラブラしていたのですが、6時、いつもの通りセンターのシャッターが閉り出したときでした。

私はセンター北側電話ボックスの前に立っていたのですが、1m70ぐらい、やせ型の男が「西成署の者だ、ちょっと来い」といい私の腕とえり首をつかみあと3mぐらいに閉まりかかったシャッターの内側、つまりセンターの内へ突き飛ばされました。中では3人が待ちかまえておりました。一人は私の胸ぐらをつかみ、一人は腕をかかえ込み、一人は前に立ちふさがって来ました。そして「こいつは今朝来た『赤』のグループの一人や。つかまえて事務所に連れて行け」などと言うのです。身の危険を感じ一旦逃げましたがすぐに又つかまり、センター南裏に連れていかれました。

そこには白っぽい軽乗用車が止めてあり、私はその車に頭から押し込まれるようにして後部座席に座らされました。私の右側に座った男は、後で名前が判ったのですが5月28日朝の事件で逮捕された韓という男でした。運転手はうす青色の自衛隊の制服によく似た右翼の制服を着ており、肩には「南西公組長」とぬい取りがしてありました。

走っている車の中で韓は「オヤジにあやまったらカンニンしてやるが、あやまらんかったら足腰立たんようにして、半殺しにして生駒山に連れていかれる場合があるぞ」と私をおどしました。

いてもたろか

車は朝来た同じ事務所の入口の前で止まりました。韓が私の胸ぐらをつかみ「降りろ」と言うので降りると、事務所の中から顔の青白い首の高いやせた男Aが出てきて運転手に何事か耳打ちしました。私は入口の所まで連れて行かれ、半開きのドアから頭を押し込まれるようにしてのぞかせました。

中を見ると二人の男がソファーに座っていました。運転手は「見てみい、あれは警察やぞ」と言ってドアを閉め、韓と二人で私を駐車場に連れて行きました。駐車場で運転手は「お前らのやっていることはすべて判ってるんや」「オヤジにあやまって早よ帰してもらえ」などと言われました。警察という二人が事務所から出て軽くあいさつをして帰ると、私は事務所に連れ込まれました。

事務所の入口の前には、いつ何処から来たか判りませんが、運転手と同じ右翼の制服をきた二人の男が木刀を手に立っていました。私は韓に一人用のリファーに座らされました。韓は机の所に居た体格のいい男Bに「アニキ、一人つかまえてきいりました」と報告。するとその体格のいい男Bは「ごくろうやったの」と答えていました。

韓は木刀を手に私の向い側のソファーに座り、Bは右側のソファーに座りました。Bは「社長が帰ってくるまで座っとけ」と命令し、韓は座ったまま木刀を磨くような格好をしながら「お前のやることはキタナイ、筋が通ってない。お前らの首謀者は誰や、それを吐くまではキッチリヤキを入れる。ウデも足もバラバラにしてやる」と言うのです。Bは「もしワシらをツズシにかかってるんやったら、お前らの仲間一人一人をここに連れてきてキッチリ足腰立たんようにしてやる」などといい「お前は組織の中のものか、それともただのアンコかんとしっこく聞くのです。

すると韓はBに「アニキ、こんな奴の言うことを聞いてたらあかんやないか、ワシがいてもたる」と言い出し、席を立ち私の後に来て「立ってみい、なめとんか」と言うのです。私は言うことを聞かないと何をされるか判らなかったので、言うとおり立つと、韓は私の背中を木刀でなぐりつけました。入口で張番をしていた二人がドアを閉めて入ってきて「どないしたんや」と韓に聞き、「いてもたろか」と言うのです。そしてそのうちの一人が木刀を下に落として私の胸ぐらをつかみ、石頭面を三回なぐりつけました。なぐり終るとこんは又入口の所へ戻りました。

やっとのことで

そうこうしていると社長が帰って事務所に入ってきました。社長はBと座り代わり、「お前はなんで帰ったんか」「MとかIとかいうのは釜でどれだけの親役や、あんな者にそのかされてついていったらつかまるぞ、あいつら逮捕状がでてるんやぞ」そして「お前はうちの飯場に入いれ、入って仕付悪いようにせん」と言いました。しかし私は荷物や用事があると言って断わりました。

そうすると社長は席を立ち外へ出て行きましたが、韓は私の左側のソファーに座り代え「お前は社長が飯場に入いれと言うのに何で断ったか、社長に無礼だぞ」と言うのです。そして座ったまま「コラコラ、どういう顔じゃ」と言いながら木刀で私の胸を何回もつつくのです。しかし私は黙っていました。

又社長が入って来てとBは社長のそばへ寄って「こいつは赤のグループの主謀者じゃないか」と言っていました。そして今度は私に向って「コラッ、お前首切ったろか。今から生駒山へ行ってサシで勝負してキッチリヤキを入れてカタにはめてやろうか」というと社長は「もういい、お前は明日の朝、今日来た者を全部つれてセンターのマイクロバスの所へ来てガン首並べてあやまったらもう何もなかったことにして水に流してやるから、明日必ずあやまりに来い」「もう帰れ」と言いました。これではじめて、誰にひっぱられるのでもなく自由に事務所を出ることができたのです。

私の前を韓が、後を例の制服を着た男がつき、事務所から道路に向いました。しかし韓は途中の暗い所でいきなり振り向き、私の胸ぐらをつかみ、石頭面を二発こぶしでなぐりつけ、「明日あやまりに来い」「お前みたいな奴は勝手に帰れ」と言いました。

本当にやっとの思いで一人になれることができました。道路にでるとすぐタクシーを止め白井で釜ヶ崎に帰ったのです。友達のアパートについたのはもう10時頃でした。（完）

《付記》この文章は、6月9日検察庁に鈴木正九郎氏を告訴した時、一緒に提出した被害者の陳述書である。原文は事実経過(1)(2)となっているが編集の都合上、一部を削除し、小見出しをつけたものである。